

思い出を物語る、語りなおす

—TATの物語とその変化の意味—

藤田 宗和

はじめに

大人は子どもに、良い体験、楽しい体験をたくさん与え、将来、子ども時代の良い思い出を残そうとする。結局、そうした体験を子ども時代に持つことが、将来の子どもの幸せにつながると信じているからだ。しかし、良い体験、楽しい体験とは何だろうか。

か。良い思い出、楽しい思い出は、よい体験、楽しい体験から作り出されるのであろうか。

幼少時の体験と現在の思い出

個人的なことで恐縮であるが、私の小さい頃の鮮明な思い出に以下のようなものがある。幼稚園へ入園の日、家の玄関の柱にしがみついて行くのを渋っ

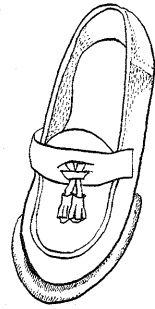
て駄々を捏ねていたら、父親からごつんとやられた時の痛さである。その時のことを思い出すとその痛さまで感じられ、未だに涙が出そうになる。次の思い出は、小学校入学式の時である。子どもたちは新しいランドセルを背負って登校する。当時の小学生は、男子は黒、女子は赤のランドセルが定番であった。父は、何を思ったのか緑のランドセルを買ってくれた。教室の後ろの棚に、黒のランドセルが並んでいる中で、自分の緑のランドセルだけがぼつんとある光景が鮮明に目に浮かぶ。私はそれが嫌でならなかった。

なお、これらの思い出は、今では次のような思いに連なる。登園の時の思い出については、結局泣きながらも登園し、その後何事もなく幼稚園になじんだ。今考えると、もしそのとき駄々を捏ねたまま登園しなければ、いわゆる分離不安型の不登園になっていたかもしれない。そんな言葉は知らなかったで

あろうが、口下手な父は息子を思い、思わず手を出したのだろう。それを未然に防いでくれた父親には感謝しなくてはという思いである。入学式の思い出については、今になって考えると、子どもに少しでも良い物を与えたいという親心から、ハイカラで良かれと思つて買ってくれたのだという思いである。

これらの思い出は、すぐに思い出すくらいであるから、その出来事に対する体験が強烈であつたということがある。そして、これらの思い出に共通する特徴は、痛さ、色という感覚・知覚的な体験的記憶がもとにあり、また当時としては良い体験、楽しい体験ではなく、むしろ辛い体験であつたということである。

しかし、次第にその体験を嫌なものとして感じることはなくなつた。むしろ、現在はその体験の良い思い出として自分の中で受け入れている、あるいは受け入れようとしている。なお、これらの思い出の



詳細が事実かどうかはわからない。時折思い出し、時たま人に語る中で、実際には状況の詳細はデフォルメされているはずだ。記憶は嘘をつく、つまり、作られるとの研究もある。しかし、思い出とそれに連なる感覚、感情は確かに「今」の私の中に存在している。だが、その体験に連なる思いは、繰り返し思い出し、語る中で昔とかなり変化している。

皆さんも子ども時代の心に残る体験的記憶があるはずだ。その体験的記憶には、何らかの感覚や感情が伴っていることが多い。こうしたある出来事にまつわる思い出し、エピソード記憶といわれるものがある。その出来事に強烈なショックが伴い、その記憶が長期にわたる不適応の原因となっているもの

は、いわゆる心的外傷（トラウマ）と呼ばれる。私の場合には当然そこまでには至っていない。むしろ辛い体験でしかなかったものが、長ずるに連れて次第にその時の親心をその体験に重ね合わせることでできるようになり、今では良い思い出として語ることができるようになったのである。体験は変わらないが、思い出しは語りなおすことができるのである。

思い出を物語るテスト

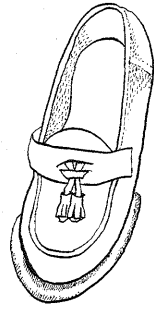
どうしてこのような話をしたかというところ、私の専門は、犯罪・非行と投影法と呼ばれる心理テストであるからである。投影法には、ロールシャッハ・テスト、TAT（主題統覚法）、バウム・テスト、家族画などがある。ロールシャッハ・テストはインクのシミを垂らしたようなカードを見せ、何に見えるかを問うもので、TATは人物の描かれているカードを見て、短い物語を作るよう求めるもので

ある。バウム・テストは一本の木を描かせるもので、家族画は家族で何かやっているところを思い描かせるものである。

いずれにせよ、被験者は何を調べられているか判らない問いを与えられ、正解のない答え（反応）をしなければならぬ。その反応には、被験者の内面の心理（無意識な認知の構え、コンプレックスなど）が反映されており、反応を分析することで被験者の心性が打診できると仮定されているので、精神医学、臨床心理学において、被験者（クライエント）の知覚、認知、感情、対人的な構えの特徴や背景にあるコンプレックス等を打診するために用いられている。

特に興味を持って研究しているものは、TATである。TATはある意味で、思い出を物語ってもらうテストである。カード（ハーバード版TAT図版）に描かれている絵は、二十世紀はじめの欧米の

風俗を髣髴とさせる人物が多く、白黒で暗い印象を与えるものである。それを見て、自由に想像して物語を作ってもらうのである。そのような絵を見て作られた物語は、一見荒唐無稽な思いつきでありそうである。しかし、その物語の素材が何も無いところから出てくるわけではない。被験者自身の内面にある記憶、思い出がその出所となり、それを利用、加工して物語が作られる。被験者にその出所を聞くと、物語の素材はつい最近の出来事、映画や小説から思いついたと言うかもしれない。また昔の思い出から題材をとったと言うかもしれない。あるいは、何も考えず、思いついたと言うかもしれない。しかし、同一被験者のいくつかの物語に共通する主題や感情のトーンには、その人の人生の主題や支配的な感情のトーンが現れることが多い。その共通特徴を抽出して、被験者の人格、人間関係を打診し、診断や援助に利用するのである。



事例から

残虐な対人非行を犯したある少年を面接した時のことである。彼は頑なで、面接時も口数が少なく、事件については自分が被害者であると受け取り、家族についても拒否的で、自分を見つめようとする姿勢は見られなかった。周囲からの情報では、彼は幼少時から過干渉で威圧的な両親に厳しくしつけられたとのことである。少しでも親の意に添わないことをすると、彼は親に注意され、よく叩かれたようだ。その結果、幼少時から強迫神経症的な行動を表出させている。長ずるに連れて、彼は動物虐待を始め、また家庭内暴力を発展させ、最終的には他人へ

攻撃を向けたのである。

そこで、内面を探るためにTATを実施したところ、葛藤に満ちた冷たい対人関係を中心とした物語を語った。特に物語の女性像は支配的で冷淡であり、これでもかというくらい女性を悪人に仕立てていた。他の物語も基本的に対立的で、強制—服従という人間関係が多く、結末も裏切りなど不幸な内容であった。これらをもとに、面接中に早期回想をさせると、彼の幼少時の思い出は、母親から床に落とした食べ物をもつたいないと、無理矢理食べさせられた時の味であった。その思い出は、感覚レベルの体験にとどまっていた。これらの結果は、彼は立ち直るためには長期間の指導・援助が必要であることを予想させた。

なお、親から丹念に話を聞くうちに、今までのいろいろな彼の不始末を親がすべて経済的に処理していたことが判ってきた。実際に親がどれだけ彼の後

始末に奔走したかの事実を、彼とともにきちんと確認していく中で、彼自身もそうした事実を受け入れ始めた。依然として彼は親には拒否的で攻撃的であったが、その中で、ほんの少しであるが彼はうつむき、涙ぐむ行動も見られた。

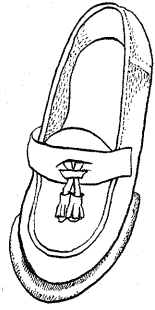
このケースの場合、長期間の援助的な面接を行うことはできなかったが、実際、彼の立ち直りには長い道程が必要であったようだ。それなりに立ち直った後に実施したTATにおいては、協力的、援助的な人間関係の物語を語れるようになったという。このときは、彼は筆者の手を離れ、実際には聞けなかったが、また幼少時の食べ物の思い出を聞いてみたいと思った。無理矢理食べさせられた食べ物の味の感覚体験は変わることはないだろう。だが、立ち直った後は、そのときの親の気持ちを肯定的に受け止める思いを付加した思い出として語りなおしてくれるのではないかと思うし、それを期待したい。彼

が変われば、その出来事について思い出も変わるだろうし、また思い出が変われば、彼自身も変わっていきはるが、（なお、この事例はいくつかのケースを重ね合わせたものである）。

子どもの体験と思い出

話を最初の問いかけに戻そう。大人は子どもに、良い体験、楽しい体験をたくさん作ってやろうとする。このこと自体に異論はない。しかし、大人の思案どおりに子どもにとつて、それが良い体験、楽しい体験であるとは限らない。むしろ、良かれと思つて行ったことが、その時の子どもには逆の辛い体験となる可能性もあるといえる。また、大人は子どもにいつも良い体験、楽しい体験を与えることができるとは限らない。むしろ、感情的になつて、子どもに辛い体験を与えることもままあるはずだ。

しかし、ある出来事の強烈な体験は変えられない



かもしれないが、それにまつわる思い出は変わるし、変えることができるのである。思い出が変わるためには、子どもの成長や周りの大人の日常的な働きかけが積み重ねることが必要である。その結果、徐々にその体験にいろいろな思いや感情がまわりつき、新たに語りなおされた思い出として語られるといえる。

非行少年や悩みを抱えている人の援助は、この視点から見れば、まずその人の物語、すなわち重要な思い出を理解し、本人が語れなければ代わりに語ってやることである。また、その物語を、つまり大切な思い出として語りなおすことができるよう手伝いをするといえる。大人の子どもへの働きかけも

同様である。いろいろな良い、楽しい体験を子どもに与えることも大切であるが、たまたま辛い体験を子どもに与えてしまっても心配することはない。その体験を将来良い物語として、つまり大切な思い出として語りなおすための日常的な働きかけがあれば、その体験は逆にその人にとって宝物としての思い出、物語となるのではないだろうか。

(お茶の水女子大学)

参考文献

Loftus, E., & Ketcham, K. 1994. *The Myth of repressed memory: False memories and allegations of sexual abuse.* St. Martin's Press.

安香宏・藤田宗和編 『臨床事例から学ぶTAT解釈の実際』新曜社 一九九四